エッセイ集　個別紹介

1．八つ当たり伝道論

福音伝道が、いつの間にか怒りや不満のはけ口になってしまう危険を、率直に指摘する一編。伝道の名のもとに人を傷つけていないかを、静かに問い直す一方で、四つの「でも」伝道を推薦する。

2．きみが代、日の丸問題

国家･象徴･信仰という、日本人が避けて通れない問題に真正面から向き合う。感情論ではなく、信仰者としての立ち位置を丁寧に探る論考。

3．宣教への警鐘

「正しいはずの宣教」が、なぜ人を遠ざけるのか。
長年の宣教経験から、危うさと落とし穴を警告する実践的な一文。

4．宣教の継承

宣教は個人の情熱ではなく、受け継がれる働きである。
次の世代に何を残すべきかを、現場の実感から語る。

5．危機

現代社会と教会が直面している「見えにくい危機」を取り上げる。
恐怖を煽るのではなく、信仰者としての覚醒を促す内容。

6. しっちゃかめっちゃかの成長

信仰の成長は、きれいな直線では進まない。
混乱や失敗を通してこそ育まれる信仰のリアリティを描く。

7. 日本人とキリスト教

日本人の宗教性とキリスト教の関係を、文化的視点から見つめ直す。
「なぜ伝わりにくいのか」を冷静に考察する基本的論考。

8. 日本人の汎神論とキリスト教

日本人に根付く汎神論的感覚を否定せず、その危うさと可能性を検討する。
異文化理解に立った神理解を模索する一編。

9. キリスト教の葬式を考える

葬儀という場面に現れる、日本人の死生観と信仰のずれ。
牧会の現場から見た、非常に具体的で切実な問題提起。

10. このままでよいのでしょうか

信仰・教会・宣教のあり方について、読者自身に問いを投げかける締めくくり的エッセイ。
答えを与えるのではなく、考え続ける姿勢を促す。

11. 日本の宣教を問う

日本という土壌で、宣教とは何であるべきかを根本から問い直す。
成功例や方法論ではなく、姿勢そのものに光を当てる。

12．日本人のためのキリスト教神学

西欧神学の翻訳ではない、日本人の感覚に根差した神学の必要性を語る。
異邦人として聖書を読むという立場が、全体を貫いている。

13．清濁併せ呑む神

日本文化の曖昧さや包摂性を手がかりに、聖書の神理解を深める一編。
単純な善悪二元論では捉えきれない神の大きさを示す。

14．これからの日本宣教

過去の成功や失敗を踏まえ、日本宣教の将来像を静かに展望する。
急進的な改革ではなく、現実に根差した提言がなされている。

15．信仰による救い

「信仰」と「救い」という基本命題を、宣教的視点から再確認する。
教理の説明ではなく、聞く者に届く言葉を探る。

16．福音とは何か

福音が「良い知らせ」であるとはどういうことかを、改めて問い直す。
言葉が先行しすぎた現代教会への、静かな問いかけ。

17. 異教の地・日本で生きる

日本社会を「異教の地」として直視しつつ、そこで生きる信仰者の姿を描く。
対立ではなく、誠実な共存の道を模索する。

18. 人間の本性と藤沢周平作品

文学作品を通して、人間の弱さと尊厳を見つめる異色の一編。
神学と文学が自然に交差する読み物としても興味深い。

19. 日本人が日本人に福音を伝える

宣教師ではなく、日本人自身が語る福音の可能性を考える。
言葉・文化・感性の共有が持つ力に注目する。

20. 信仰と救い

信仰と救いの関係を、単純化せずに丁寧に扱う。
結論を急がず、読む者に考える余地を残す一編。

21. 人間は創造主に似せて造られた

人間理解の出発点を「神のかたち」に据え直す。
尊厳・責任・希望を一つの線で結ぶ、全体の基調となる一編。

22. 日本人に天地創造の神を紹介する

抽象論を避け、日本人の感覚に届く言葉で創造の神を語る試み。
聖書理解と文化理解を橋渡しする導入的論考。

23. ぶどう酒をお造りになったイエス様おがｓ

めると同時に、深い神学的示唆を含んでいる。かなの結婚式の葡萄酒の奇跡を通してイエス様が地域社会と人々の喜びをどれほど大切にされたかを描く。禁酒主義や教会の伝統が、いつの間にか聖書理解そのものを歪めてしまう危険を鋭く指摘する一遍。福音とは、人々の生活や文化から切り離された「正しさ」ではないことを、具体的な物語で示す。

24. 偶像の世界でクリスチャンとして生きる

偶像に満ちた社会で、信仰者はどう立つのか。
対決ではなく、識別と節度を重んじる姿勢が示される。

25. 普遍的福音･日本人への福音

福音の普遍性と、日本人への具体性を同時に捉える。
「同じ福音が、違って聞こえる」理由を丁寧に解き明かす。

26. イエス様を信じない者

信じない者を外側から裁くのではなく、内側から見つめ直す。
救いの範囲と神の主権をめぐる、静かだが鋭い問い

27. 被造物によって知られる神

自然と良心を通して知られる神の働きに目を向ける。
聖書と自然啓示の関係を、日本的感覚で再考する。

28. 旧約聖書は誰に与えられたか

旧約聖書の宛先という根本問題を、歴史的･神学的に整理する。
異邦人理解にとって欠かせない視点を提供する一編。

29. 私たちの「神」と日本人の「神」

同じ言葉で呼ばれても、指しているものは同じとは限らない。
神概念のズレを率直に示し、対話の出発点を整える。

30. 日本人のための福音理解

ここまでの議論を踏まえ、日本人にとっての福音理解をまとめる。
入門であり、同時に深い思索への招きでもある。

31. 救いの歴史を考えながら創世記を読む

創世記を断片的に読むのではなく、救いの歴史の流れの中で捉え直す。
旧約理解が、福音理解を深めることを静かに示す一編。

32. 日本人を裁くもの

日本人を最終的に裁くのは何なのかを、宗教･文化･良心の観点から考察する。
外からの裁きではなく、内側にある基準に光を当てる。

33．しなければならない三つのこと

日本宣教のために、どうしても避けて通れない三つの課題を提示する。
理想論ではなく、実際の宣教経験に根差した提言。

34．日本人の神意識

日本人の中に潜在的に存在する神意識を丁寧に掘り起こす。
「無宗教」という言葉の裏にある深層を読み解く。

35．日本人の信仰心

行動や習慣の中に現れる、日本人独特の信仰心を見つめる。
教義とは異なるかたちで表れる「信じる心」を尊重する姿勢が貫かれている。

36．異邦人への福音

福音が、ユダヤ人だけでなく異邦人に向けられている意味を再確認する。
パウロ的視点を背景に、宣教の普遍性を語る一編。

37．福音を福音として聞いてもらえるように

福音が「良い知らせ」として届かない理由を率直に検証する。
語り方以前に、聞き手への姿勢が問われていることを示す。

38．キリストを信じるということ

「信じる」とは何かを、抽象論ではなく生活の中から考える。
決断よりも、関係としての信仰に重きを置く内容。

39．私たちの福音

大きな理論ではなく、小さな物語の中に現れる福音を描く。
証しの力と、その静かな説得力を再認識させる一編。

40．聖書はだれに向けて書かれたか

聖書の読者とは誰なのかという根本問題を扱う。
ユダヤ人と異邦人の区別を踏まえ、読み手の立ち位置を問い直す。

41．フィリピンの思いで

宣教の現場で出会った人々と出来事を、温かな眼差しで回想する。
異文化の中で経験した喜びと戸惑いが、静かな証しとして語られる。

42．日本社会の中での仏壇の役割

仏壇という存在を、単なる宗教施設としてではなく生活文化として捉える。
日本人の死生観と記憶の在り方を理解するための重要な視点を示す。

43．神はいないと言う日本人は間違っていない

無神論的に見える日本人の感覚を、表面的に否定しない。
その言葉の奥にある思考と誠実さを汲み取り、対話の可能性を開く一編。

44．日本人に伝道する

方法論よりも、相手を理解する姿勢の大切さを強調する。
伝道が「語ること」以前に「聞くこと」であると教える。

45．大きな教会･キリストの望みか

教会の規模と本質の関係を問い直す。
成長主義に流されがちな現代教会への、静かな警鐘。

46．天地創造の神と日本人の信仰心

創造信仰と日本人の自然観･畏敬の念を結びつけて考察する。
日本的感性が、聖書理解を妨げるのではなく助けうることを示す。

47．やさしい福音

基礎的教え
難解になりがちな福音の核心を、平易な言葉で伝える試み。
初めて信仰に触れる人への配慮が随所に感じられる。

48．異邦人の救いのための神学

異邦人の救いをめぐる神学的課題を、宣教の視点から整理する。
教理の枠に閉じない、広い視野が特徴の一編。

49．私の個人伝道・賢子さんの場合

一人の人物との出会いを通して、個人伝道の現実を描く。
物語として読めると同時に、深い神学的示唆を含んでいる。

50．心に書かれた律法と文字で書かれた律法

内なる良心と、外から与えられた律法の関係を考える。
日本人の宗教意識と聖書理解を結びつける重要な論考。

51．日本人の心に記された律法と日本人の宗教意識

日本人の良心や道徳感覚の奥にある「内なる律法」を見つめる。
信仰と文化が交差する地点を、丁寧に言葉にした一編。

52．異邦人に向けてパウロが語った神

パウロの説教を手がかりに、異邦人理解の核心を探る。
聖書が前提を共有しない人々に、どのように語られたかを示す。

53．アブラハムはいつ救われたのか

救いの時点という難問に、聖書全体の流れから迫る。
行いか、信仰かという単純化を避けた、思索的な論考。

54．二種類ある偶像礼拝の罪

目に見える偶像だけでなく、心の中の偶像をも視野に入れる。
現代人にも深く関わる問題として、偶像礼拝を再定義する。

55. 神様の自己紹介

神は人間にどうご自身を示されたのかを、聖書に即して考える。
人間側の理解ではなく、神の側の語りに耳を傾ける姿勢が貫かれている。

56. 日本文化を肯定するのか

日本文化を無条件に否定も肯定もしない立場を明確にする。
福音との緊張関係を保ちながら、誠実な対話の可能性を示す。

57. 日本人に受け入れられる福音

「迎合」と「翻訳」の違いを慎重に見極める。
日本人の感性に届く福音とは何かを、具体的に考察する。

58. 日本人に私たちの神を紹介する

神を説明するのではなく、紹介するという姿勢を重視する。
関係としての信仰理解が、全体を静かに導いている。

59. 救われる前に助けてくださる神様

信仰告白以前に働かれる神の恵みに目を向ける。
多くの体験的証しと重なる、慰めに満ちた一編。

60．これからの日本宣教のために

これまでの議論と経験を踏まえ、日本宣教の今後を展望する。
結論ではなく、次の歩みへの指針として読まれるべき内容。

61．今後の日本宣教のために

日本宣教のこれからを考えるにあたり、改めて立ち位置を確認する一編。
方法ではなく、心構えと視野の転換が求められていることを示す。

62．現代の日本人への福音を語ろう

現代日本人の思考様式や感性を踏まえ、福音をどう語るかを考察する。
説得よりも理解を重んじる姿勢が全体を貫く。

63．異邦人のための神学

異邦人の立場から神学を組み立て直す必要性を率直に語る。
既存の枠組みに安住しない、挑戦的でありながら牧会的な論考。

64．私の後悔

宣教と牧会の歩みの中で抱えてきた後悔を、正直に振り返る。
自己弁護ではなく、次世代への静かな証しとして読まれる一編。

65. 心に記された律法と文字で書かれた律法

内なる律法と聖書の律法の関係を、改めて整理する。
日本人の宗教意識との接点を意識した、思索の深い内容。

66. 二つの律法

律法が二重に与えられている意味を、聖書全体の文脈から考える。
異邦人理解と救済論を結びつける重要な一編。

67. 大挙してキリスト教を受け入れた日本人

歴史の中で、日本人が集団的にキリスト教を受け入れた事例を取り上げる。
信仰と社会の関係を考える上で、示唆に富む内容。

68. 使徒パウロに学ぶ異邦人伝道

パウロの宣教姿勢を通して、異邦人伝道の本質を探る。
戦略ではなく、神理解と人理解に立脚した伝道観が示される。

69. 神の姿に似せて造られた人間性とキリスト教

人間の尊厳を「神のかたち」という視点から深く掘り下げる。
本エッセイ集全体の核心に触れる、思想的に重みのある一編。

70. キリストを信じなくても救われるなら

信仰と救いの関係をめぐる、最も根源的で避けがたい問いに向き合う。
断定を避けつつ、神の主権と恵みの広がりを静かに見つめる。

71. 人の中に神様の姿を見よう

人間の中に残された「神のかたち」を見つめ直す一編。
裁きよりも洞察を重んじ、人を見る眼差しの転換を促す。

72. 現代の日本人への福音を語ろう

変化する社会と価値観の中で、福音をどう語るかを再考する。
急がず、押しつけず、対話を重ねる姿勢が示されている。

73. 神がお与えくださった二つの律法

神が人類に与えられた律法の二重性を、歴史と啓示の流れから考える。
ユダヤ人と異邦人の違いを理解する鍵となる論考。

74. 牧会日誌

日々の牧会の中で出会った出来事や思いを、率直に記した記録。
理論では語れない現場の重みと、人間的な葛藤が滲む。

75. 西欧回りのキリスト教にはまかせておけない

西欧中心の神学や宣教理解に対する、明確な問題提起。
日本人として、異邦人として考える必要性を強く訴える。

76. ベン・バラン兄弟のこと

フィリピンで出会った一人の兄弟の生涯と信仰を描く。
物語として心に残り、同時に神の導きを感じさせる証し。

77. 私の心配

宣教と教会の将来に対する、率直で誠実な心配を語る。
不安を隠さず差し出すことで、読む者にも考える余地を与える。

78. 何事のおわしますかは知らねども

神道の言葉を通して、日本人の神観の深層に迫る。
宗教間の対立ではなく、理解の糸口を探る姿勢が印象的。

79. この末の世に

終末という主題を、恐怖ではなく覚醒の視点から扱う。
今をどう生きるかを問い返す、静かな緊張感を持つ一編。

80. 日本人の自信の回復と伝道

失われつつある日本人の自信と尊厳を、伝道の文脈で捉え直す。
福音が人を貶めるのではなく、立たせるものであることを示す。

81．心に記された律法

人の内に刻まれた律法が、どのように働くのかを静かに見つめる。
良心と神の語りかけの関係を、生活の感覚に即して考察する。

82．日本人の宗教的二重性

日本人が抱える宗教的な二重構造を、否定せずに言語化する。
矛盾の中にこそ理解の糸口があることを示す一編。

83．AI を使った投資話

現代的な題材を通して、人間の欲望と判断の危うさを浮き彫りにする。
技術の問題ではなく、人間理解の問題として読むべき内容。

84．神の子たちと人の娘

創世記の難解な箇所を、慎重かつ大胆に読み解く。
神話化や単純化を避け、聖書本文に向き合う姿勢が貫かれている。

85．クリスチャンとして生きる

信仰者としての日常の在り方を、飾らずに語る。
理想論ではなく、現実の生活に根ざした励ましの一編。

86．パウロに倣って

使徒パウロの生き方と宣教姿勢から、学ぶべき本質を抽出する。
形式ではなく、内的な動機に目を向ける内容。

87．天地創造の神と日本人の信仰心

創造信仰と日本人の自然観･信仰心を、再度深く結び直す。
本エッセイ集全体の主題を、もう一度根底から支える論考。

88．グローバリズムの指針

混迷する世界の中で、何を基準に生きるのかを問い直す。
信仰と人間性を失わないための、静かな指針として締めくくられる